

優秀賞

だいじょうぶだよゾウさん

第一日暮里小学校 六年 藤倉 みゆ

柳田先生お元気ですか。

先生、この絵本は私にとってかけがえのない一冊になりました。

私は、昨年大好きだった弟が、空へ旅立ちました。私はこの絵本を読んで弟はゾウさん私はねずみと考えました。私はねずみのように弟のためにもう少しできることがあったのではと考えています。今、思うと、弟に直接できなくても、お母さんやお父さんが病院で弟のかんびょうをしている間もつとできることがあったのと思っ
てしまいました。

ゾウさんとねずみさんは、小さいころからの友達で

ずっと一緒にいたのでおたがいの気持ちを理解して楽しんで、助けてあげたり心の支えになっていたんだなと思います。ずっと、このままでいたいなんて思っていたはずです。でも、ゾウさんも年をとって命があとわずかとなった時に、行かなければならないゾウの国に行くことが近づいてきていることがわかった時ねずみは、その日がくることが、とてもわかったのだと思います。

今まで、ずっと一緒にあたりまえのようにいたのに、いなくなってしまうことが、どれほど、辛く、悲しいことか、とても心が痛いです。

できれば、ねずみだつてずっとこのままがいいと思っ
ていたでしょう。

でも、ゾウさんの命があぶなくなっていることに気づいた時ねずみは、ゾウの国へ安心して行かれるようにしてあげたいという気持ちにかわったのです。本当はずっ

と一緒にいたいと思っっているのに。ねずみのその気持ちが私の気持ちと重なりました。

先生、私の弟も、空へ旅立った時はすごく悲しかったです。けれど、弟は私の心の中にずっといるんだと思うことで、少しだけ心が落ち着きました。私は、ねずみさんに教えてあげたいです。

ゾウさんは、ねずみさんの心の中にずっといるよって。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

藤倉さんの手紙を手にしたとき、私はすぐに、「あ、あの子がまた書いてくれた。今度はどんなことを書いてくれたんだろう」と思いました。五年前、藤倉さんが一年生だったときに大賞を差し上げた「すてきなしゅくだい」というすてきなおたよりのことを、私は印象深く覚えていたからです。

あのときは、動物の子どもたちの学校で、家族にだっこをして

もらう宿題が出される絵本を読んで、自分も両親と祖父母にだっこしてもらったときの感じを、とても楽しく書いていたので、あたたかい幸せな家族だなあと感動しました。

でも、五年たって今回いただいたおたよりを読んで、その後藤倉さんの家族に大変なことがあったことを知り、胸がしめつけられる思いがしました。藤倉さんには妹と弟がいて、弟が難病だったのですね。そして藤倉さんが五年生るとき、五歳だった弟が天国に行ってしまったという。どんなに悲しかったことでしょう。

そんな中で、心を癒してくれたのは『だいじょうぶだよ、ゾウさん』だったという。年離れたゾウさんが病気も重くなって、ゾウの国に旅立たなくてはいけなくなったとき、仲よしのネズミくんは別れたくない気持ちを持ちつつも、ゾウさんが無事にゾウの国に行って幸せになれるように、懸命に世話をして見送ってあげる話です。

藤倉さんは、ネズミの気持ちに自分の気持ちが重なったという。

「今まで、ずっと一緒にあたりまえのようにいたのに、いなくなってしまうことが、どれほど、辛く、悲しいことが、とても心が痛いです」という藤倉さんの述懐は、弟を亡くした身だからこそ、心の底からにじみ出てきた言葉でしょう。

それでも、『だいじょうぶだよ、ソウさん』を読んだことによって、藤倉さんはこう書けるようになったのです。

「私の弟も、空へ旅立った時はすごく悲しかったです。けれど、弟は心の中にずっといるんだと思うことで、少しだけ心が落ち着きました」

大切な人、愛する人を亡くしたことによる悲しみから立ち直るうえで、絵本が大きな力になったという点で、大賞の葛西光榮さんも藤倉みゆさんも、共通しています。二人の文章は甲乙つけ難いものですが、藤倉さんには前に大賞を差し上げていたので、今回は葛西さんに大賞を譲りました。ごめんね。

藤倉さん、弟を亡くした悲しみは悲しみとして、無理に涙を抑

えなくていいのです。でも、心の中に生きている弟は、いつまでも可愛い目差しで、藤倉さんを支えてくれるでしょう。」「一緒に生きているんだ」と思い続けると、きっと弟の声が聞こえる日があると 생각합니다。そんなときには、おたよりをくださいね。